

生涯教育の基底としての少年教育

安心院 光 義

(大分県立九重少年自然の家)

1. 生涯教育論の中で少年教育はどう考えられているか

(1) 生涯を通じて学習する基礎について

生涯教育については、中央教育審議会より「人間の乳幼児期から高齢期に至る生涯のすべての発達段階に即して、各時期における望ましい自己形成を可能にする方途の考察」と「教育機能の領域・形態の面から、家庭の持つ教育機能をはじめ、学校教育、社会教育、企業教育さらには民間の行う各種の教育、文化事業にわたって広く存在する諸教育機能を生涯教育の観点から総合的に考察する」ことについて答申が出され、我が国も生涯教育の推進について国家的な立場で取り組むことになった。筆者が少年教育施設に勤務している関係上、各種答申や識者が述べていることを少年教育の立場から、家庭、学校、地域の各教育分野の基本について考察することにした。

先ず、家庭教育の面では「家族形態の変化、兄弟姉妹の数の減少、女性の社会進出に応じた育児と職業生活を両立させるための条件の未整備、父親の在存感の希薄化、知育偏重の風潮」などから、教育荒廃の背景に家庭

の教育力の低下が指摘されている。

臨時教育審議会の第二次答申では、「幼児教育期における親の絆の形成や社会生活に必要な基本的生活習慣を身につけさせるためのしつけを行う」など家庭教育の役割をのべ、家庭は学校・社会と並ぶ生涯にわたる学習の場として位置づけるとともに、「親の愛情は安定した情緒を育てあげ、しつけは自主性を育てる」ことにつながり、特に「家庭の愛情としつけは生涯学習の原点」として、生涯教育の立場から家庭教育を見直している。

学校教育については「個々の児童・生徒の個性・人格の尊重を基盤とし、知育だけでなく社会性や情操をも含め心身の全面的な調和発達を図り、生涯にわたる自己実現を期するための基礎・基本を修得する」という改善の視点が押えられている。生涯教育の面では「社会の変化・発展に主体的に対応できるよう生涯学習の基礎を培うという観点から、自己教育力の育成を図る」と臨教審の答申に述べられ、生涯学習の機関として生涯にわたって学び続ける態度や意欲を育成することが強調されている。

生活を通じた少年教育の場としての地域の在り方については、異年齢の子供の集まりを主として共通の生活課題を媒介とした「地域子ども集団」の創造である。少子家族化が進むなかで、地域子ども会はもちろんのこと、スポーツ少年団等の子ども集団の育成と活動の必要性はますます高まっている。年少時から生活課題の解決の方法やフォローアップ、リーダー性を主体的に学ぶことが大切である。

家庭・学校・地域で学ぶ基本的なことから生涯学習を基盤にした今後のあり方が述べられている。

(2) 少年教育における連携について

少年教育については、家庭・学校・地域で生活を行う上での態度・技能の取得がなされているが科学技術や都市化の進展は、生活の便利さを支えている反面、自然環境の減少、人間関係の希薄化等により少年に自然体験や勤労、遊びの欠落など心身の成長を阻害する欠損体験が指摘されている。

社会の変化は、各教育分野が担っている役割りを果たし得ない状態が顕

著に現われて健全に育成するための連携や協力による相互補完という課題が生まれてきた。そこで、この連携の問題について考えてみることにする。

臨時教育審議会では、家庭教育の役割割りについて親と子という基本的人間関係から親が果し得る教育機能とは何かとふまえた上で、連携に関する内容として「個人生活に関する一食事、睡眠、排泄、洗面、歯磨き等」については、家庭と学校の連携・協力が必要であり、反復訓練により力強い意志を形成して自主性を身につけた少年を育てることや「社会に関する一あいさつ、言葉使い、約束を守る、生命を尊ぶ、思いやり等」については、家庭と地域の人々の連携・協力が重要であると述べている。「幼少期から、安定した情緒、協力と連帯の意識をもった人間を育てる」努力の大事さを強調している。

学校教育については「学校は、生活の中の一部分を非常に組織的に効率よく」取り行なおうとしたものであり、それが、知育中心の学校生活にかたよりがちで、自然体験、社会体験の不足が指摘され、家庭や社会生活における教育活動の大きさが再認識されている。

学校教育が豊かな人間形成の育成を図る教育の機会を提供することについて、学校外教育との連携を保つことで教育活動を充実させ、閉鎖的になることをさけることが述べられている。例として、コミュニティ施設の活用等による学校から地域への参加、図書館業務、教師の補助等に地域住民の協力が考慮されている。このことは、多くの少年に利用されている少年自然の家など、今後の教育の「質的転換」が求められているのではないだろうか。

2. 少年期に体験させたい事柄について

少年団体活動の意義についても述べなければならないが、少年施設からみた少年たちはどんな体験をし成長へのきっかけをつかんでいるか述べることにする。

(1) 集団生活から得られるもの

家庭が家族数や子どもの数が少なくなり、集団の中での個人の生活態度がみんなの生活に支障をきたすことの理解が、生活体験を通さないと得られにくい。「少年自然の家に来て、集団生活のむずかしさや楽しさを知りました」「集合が悪くて、団体生活において私たちの弱い点がみられた」など、規律を守って協力しなければならない集団生活に気づいている。こんな生活の体験は、ふだんの家庭や学校の生活では得られにくい。このような体験の積み重ねが自主性や自発性の育成のきっかけになる。

(2) 自然体験から得られるもの

かつては、少年は生活の中に自然があり友と魚を取り、鳥を追い、川で泳ぎ、木や竹で工作をしながら自然の遊びの中で成長した。

現在の子どもたちは、生活環境の変化で学校と家庭の往復が主となり、学校から帰ると塾通い、テレビなど個人的な生活にひたりがちで自然に親しむことを忘れてている。

少年自然の家では、少年を自然の中に開放して活動させることにより「自然のきびしさや不思議さが、みんなもぼくもわかった」と自然にふれた体験を語り「協力しあい、助けあい、みんなの力を合わせれば偉大な力となるんだ」と自然の中での人間的ふれあいの深まりを体得して、自発的な生活態度の育成をうながしている。

(3) 自己の再発見

少年自然の家では、少年の発達段階や体力を考え、計画にしたがった日課と生活のしかたにもとづいて集団生活を送っている。規律ある生活態度から少年たちは日課にしたがった活動や生活ができるよう努力することにより、自己の生活のあり方について見直す機会となっている。

感想文をみると「きまりはきびしかったけどとても良かったと思う」「これで自分のことは自分でやるのが大切だとわかった」など自己の生活のあり方について反省している。集団行動の基礎となる各人の生活態度のあり方や行動を反省し自覚が生まれ自律性を身につける場となっている。

3. 体験の意義について

少年自然の家の体験が利用後どう生かされていくか学校教育との補完の立場で考察すると、生活や活動を通して「友だちの友情を知り」基本的な規律をふまえれば「きまりはきびしかったけど、とても良く」それぞれの少年に合った多様な生活が可能である。各活動は個人やグループごとの判断で行動ができ成功すれば自信が生まれ、積極的な行動が取れることになり活力ある生活態度となる。学校生活にも活気が生まれることになる。

家庭生活においても「こんなに弁当がおいしいとは思わなかった」「整理整とんも班の人が協力してよくできた」「毎日の清掃もみんなきれいにした」など基本的な生活習慣の育成となり「学んだことを家庭でも役立てたいです」と家庭生活の在り方についても少年たちの反省の場となり、家庭教育の補完の機能の役割を持っている。

地域社会への対応についても、野外活動を通じて自然の中で活動する楽しさや団体生活のきびしさ「天候が悪いとき登山して寒くてつかれた」、苦しさに耐えた体験が「こんなものではなかった」など事後の生活の中に生かされ自発性が育っている。「自然と親しみすばらしかった」ことが自然の良さの再認識、ひいては自分の郷土の見直しとなり、地域ごとの入所は連帯感の高揚となり地域の教育力を高める場となっている。

少年期に必要な体験は、家庭にあっては愛情としつけ、学校にあっては基礎・基本の修得、地域にあっては子ども集団の創造である。このことが生涯にわたって学び続ける人間の育成の在り方についての基本ではないだろうか。

ささやかな考察を試みた次第である。